

読む読点、聞く読点

－「読む」と「聞く」の文章表出における接点－

宮城 信

1. はじめに

句読点は、文章をわかりやすく読ませるために非常に重要な要素である。日本語の文字言語のくぎり符号である句点「。」には、ほぼ確定した使い方がある。これに対して読点「、」には、曖昧なところ、すなわち個人によるゆれが多いとされている。その一因は、読点が「意味の切れ目」と「息の切れ目」の二つの理由に基づいて打たれることにある¹⁾。多くの先行研究では、まず「意味の切れ目」の条件を抽出し、補足的に「息の切れ目」でも切ることができるとして、読点の適正な使い方が模索されてきた。その規範を網羅的に整理した初期のものに、広田栄太郎(1959)がある²⁾。

(1) 読点の使い方

A 読点の使用を必要とするもの。

a. 読み誤りを避けるため。

(i) 読み取りや読みにくさを避けるために使う。

(ii) 語句を並べる場合に使う。

(iii) 語句を隔てて限定修飾する場合。

b. 読みにくさを避けるため。

(iv) 文の中止するところに使う。

(v) 文の成分を倒置した場合に使う。

c. 文頭にくる語句の性格を明らかにするため。

(vi) 文の始めに用いる副詞・接続詞

のあとに使う。

(vii) 感動詞、呼びかけ、返事などの語のあとに使う。

B 読点の使用が望ましいもの。

(viii) 限定・条件などを表す文や語句のあとに使う。

C 読点の使用が自由なもの。

(ix) 叙述の主題となる語のあとに使う。

(x) 会話文、引用文などを「 」で囲んで「と」で受ける場合、それが述語に直接続かないときは、「と」の下に使う。

(xi) 息の切れ目や読みの間のところに使う³⁾。

(小泉保(1989) pp.6-7、下線は論者⁴⁾)
読点を打つ規範的な条件(または打つても不自然にならない場所)は、(1)の広田の規範でほぼ言い尽くされたと言ってよい⁵⁾⁶⁾。しかしながら、本稿の興味は「多くの人はどこに読点を打つのか」ということにあり、(1)の規範だけでは十分ではない。ここで改めて読点を打つ動機について考えてみると、基本的には、読み手の負担をできる限り軽減するためと考えてよい。ただし、この読み手の負担とは、書き手の側から意識した負担であることに注意されたい。また、これとは質的に異なるのが、(1) xiの「息の切れ目や読みの間」に準じた使い方、おそらく

ここには、筆者の個人的なくせなどその他の雑多なものも含まれており、ゴミ箱的な扱いになっているように思われる。本稿でこの中身にどのような場合が含まれるのかを明らかにすることはできないが、読点すべてが貫徹した規範意識によって打たれるわけではない。例えば、次のように書き手の側の都合で打たれることもある。川上泰 (1974) には、「積極的にそこで息を切ってもらいたいために読点を打つというのではなく、別の変な場所で切ってもらいたくないために打つ—ということもあるだろう。」(p.22) という指摘がある。この指摘は、次の二点において、重要な意味を有している。一つ目は、しばしば読み手と書き手の読点の使い方の基準がずれるということ。二つ目は、(1) を含めこれまで先行研究で示された規範は、書き手の側の規範意識の反映であるということである。

2. 問題の背景

1. でまとめたように、諸先行研究によって書き手の側からの読点の規範的な使い方が示されたが、「書き手と読み手の規範意識はどのように異なるのか」という観点や「どのような条件でも読点の打ち方は変わらないのか」など、実際の読点の使い方に関する知見の蓄積が少ないように思う。そこで本稿では、読み手、および聞き手の立場から、読点の使い方と効果について調査・考察していく。

2.1 読点の多寡と読みやすさの関係

本稿では、高専生⁷⁾を被験者として、読点に関する様々なアンケート調査を行った。まず、読点の多寡が文の読みや

すさ、理解のしやすさにあたえる影響について調査した。テキスト⁸⁾には、「魔術」(芥川龍之介著)の冒頭部分を用い、読点の打ち方を換えたテキストの内の一つを被験者に読ませて評価を問うた。読点の打ち方は、①〈原文に即したもの〉aの位置、②〈(1)の規範に従って可能な限り読点を打ったもの〉bの位置、③〈読点を最小限に減らしたもの〉cの位置の三通りで、以下の(2)のようである。

(2) ある/(_{ab})/時雨の降る晩のことです。

私を乗せた人力車は/(_{ab})/何度も/(_b)/大森界わいのけわしい坂を/(_b)/上ったり/(_b)/下りたりして/(_{ab})/やっと/(_b)/竹やぶに囲まれた/(_{ab})/小さな西洋館の前に/(_b)/かじ棒を下ろしました。もう/(_b)/ネズミ色の/(_b)/ペンキのはげかかった/(_{abc})/せま苦しい玄関には/(_b)/車夫の出した/(_b)/ちょうちんの明りで見ると/(_{ab})/インド人マティラム・ミスラと/(_b)/日本字で書いた/(_{abc})/これだけは新しい/(_{ab})/セトモノの標札がかかっています。

調査は次のように行った。

- ・調査対象：高専1、3年生(183名)
 - ・調査方法：三種類の任意のテキストを一つ読ませて、「読みやすい」、「やや読みにくい」、「かなり読みにくい」の三つから評価させた(読みにくいを選んだ場合、その理由を書く)。
- その結果は次のようになる。

[表1] 読点の多寡と読み取りやすさ

	読みやすい	やや 読みにくい	かなり 読みにくい	計
原文	9	32	17	58
多い	5	40	18	63
少ない	9	35	18	62

「句点の位置が少し変で、読みにくい」、

「区切りが悪すぎ、テンポ悪い」などの理由があげられたが、総合的な評価としては、文の内容そのものの影響が強く出ており、読点の多寡による文の読みやすさへの影響は見いだせなかった⁹⁾¹⁰⁾。

2.2 読点の打ち方に関する予備調査

試みに、文のどのような場所に読点を打つのか（これまで、どんな学習したのか）について、小調査を行った。

- ・調査対象：高専1年生(41名)
- ・調査方法：読点を打つべき場所を任意に書かせた。

主なものをあげると、次のようになる。

- (3)・複数の語が並んでいるとき(32名)
 - ・「は」または「が」のあと(24名)
 - ・接続詞のあと(24名)
 - ・長くならないように区切る(23名)
 - ・と言ったの「と」のあと¹¹⁾(13名)

小中学校の作文教育の影響か、文の意味や構造ではなく、特定の形式に付随した回答が多かった。しかしながら、実際の読点の多くは文の構造に依存した場所に打たれやすいことが指摘されており¹²⁾、被験者の持つ意識と実際の打ち方とはかなりの隔たりが見られるようである。

2.3 本稿の意義と調査の必要性

ここまで見てきたように、(1)のような読点の使い方の規範意識(著名な作家の作品を対象とした、読点の使い方の分析に基づいたもの)と(3)の一般の使用者¹³⁾との読点の使い方の認識は必ずしも重なっておらず、また文章の書き手の読み手への配慮が十分に効果を上げているのかという点においても疑問が残る

([表1]を参照)。読点を打つという行為を考えるにあたって、使用者の使い方を調査し、検討を行う必要があると思われる。先行研究では、高木翠(1974)¹⁴⁾、森山卓郎(2012)¹⁵⁾が使用者の側からの読点の使い方を観察し、「そもそも我々はどこに読点を打ちやすいのか」を探ろうとしている。しかしながら、このような観点からの研究は質・量共に未だ十分ではない。よって、本稿では使用者の側に注目して、調査・考察を積み重ね、その実態を明らかにしていく。

3. 使用者の実態と分析

3.1 調査の方法

読点使用の実態を観察するため、次の三つの調査を行った。概要は以下の通りである。

(調査1)の概要

- ・調査対象：高専3年生(90名)
- ・調査方法：読点を削除したテキスト三種類(3.1.1(4)～(6))を読ませ、適正な文章にするために必要と思われる場所に読点を打つように指示した。

(調査2)の概要

- ・調査対象：高専3年生(90名)
- ・調査方法：調査1の三種のテキストに、(1)の広田の規範を参照して読点を打つ可能性のある場所すべてに読点を打ったものを読ませ、余剰と思われる読点を消して適正文にするように指示した。

なお、調査1と調査2の被験者は同一で、二つの調査に一ヶ月余の期間をおき、先回の影響が少なくなるように配慮した。

(調査3)の概要

- ・調査対象：高専1年生(115名)

- ・調査方法：「間(Pause)」の異なる三種類の音読の録音(3.1.2 (7)～(9))を聞かせたあと、聞き書きし、適正な文章にするように指示した。なお、特に句点や読点を使うような指示は出さず、音読は計五回聞かせた。

3.1.1 読んだ文の読点(調査1、2)

調査1、2に使用したテキストは、(4)「勝負事」(菊池寛著)、(5)「杜子春」(芥川龍之介著)、(6)「グスコブドリの伝記」(宮澤賢治著)の冒頭部分からの抜粋である。調査1では読点を削除した文章を、調査2では(4)～(6)の(a)～(cc)に読点を打った文章を用いた。

- (4) 勝負事ということが^(a)話題になった時に^(b)私の友達の^(c)一人が^(d)次のような^(e)話をしました。
「私は^(f)子供の時から^(g)勝負事という^(h)どんな⁽ⁱ⁾些細なことでも^(j)厳しく^(k)戒められて^(l)来ました。幼年時代には^(m)誰でも⁽ⁿ⁾一度は^(o)もてあそばさきまっている^(p)めんこ^(q)ねつき^(r)ばい^(s)などというもののにも^(t)ついで^(u)手を^(v)触れることを^(w)許されませんでした。
- (5) 若者は^(a)名は^(b)杜子春といって^(c)元は^(d)金持の^(e)息子でしたが^(f)今は^(g)財産を^(h)費ひ尽して⁽ⁱ⁾その日の^(j)暮しにも^(k)困るくらい^(l)あはれな^(m)身分に⁽ⁿ⁾なつて^(o)ゐるのです。
何しろ^(p)その頃^(q)洛陽といへば^(r)天下に^(s)並ぶものがない^(t)繁昌を^(u)極めた^(v)都ですから^(w)往来は^(x)まだ^(y)ひっきりなく^(z)人や^(aa)車が^(bb)通つて^(cc)ゐました。
- (6) グスコブド리는^(a)イーハトーヴの

^(b)大きな^(c)森の^(d)なかに^(e)生まれましました。おとうさんは^(f)グスコブドリという^(g)名高い^(h)木こりで⁽ⁱ⁾どんな^(j)大きな^(k)木でも^(l)まるで^(m)赤ん坊を⁽ⁿ⁾寝かしつけるように^(o)わけなく^(p)切つてしまふ^(q)人でした。

ブドリには^(r)ネリという^(s)妹があつて^(t)二人は^(u)毎日^(v)森で^(w)遊びました。

以下、調査1、2の結果をまとめ、考察を加えていく。読点の使い方で本稿が取り立てて注目したいのは、同じ被験者が作業をしても、テキストに読点を打っていく場合(調査1)と、先に打たれた読点を消していく場合(調査2)とでは、適正と判断する読点の使い方に違いが見られることである。例えば、打つ場合より消す場合の方が読点の数が相対的に多くなりやすい。(末尾の[表3]計の欄を参照)。これは使用者は、迷うと少なくとも消す場合には、手を加えることを回避する傾向があることを示している¹⁷⁾。

次に、(1)の広田の基準との異なりの検証である。(1) viii「限定・条件などを表す文や語句のあと」の読点は望ましいとされるが、その種類によって使われやすさに違いが見られる。(4)勝負事の「次のような(e)」では、消す場合では読点は比較的使いやすいが、打つ場合ではあえて打つことは少ない(使われた率¹⁸⁾ 消85.6%、打26.7%)。読み手の意識としては、そこに読点があつてもよい、あつた方がどちらかという読みやすいくらいの気持ちであつたと判断される。どうしてもというほどではなかったので、打つ方では積極的に採用されなかったのではないか。逆に、(5)杜子春の「息子でしたが(f)」(消96.7%、打94.4%)や「都です

から(w)」(消95.6%、打91.1%)など((6)ブドリの「(大きな)木でも(l)」も同様)、人物や場面の状況を限定する修飾句の場合、どちらも読点が使われることが多い。また、時間的な限定を表す、(4)勝負事の「話題になった時に(b)」(消97.8%、打94.4%)、「幼少時代には(m)」(消85.6%、打73.3%)のような句も、消す・打つの違いなく、読点が使われやすい。これらに比べると、(6)ブドリの「森で(w)」のような場所の修飾句では積極的に読点が使われることは少ない(消6.7%、打3.3%)。

次に、(5)杜子春の「杜子春と言って(c)」(消93.3%、打60.0%)や「費ひ尽くして(i)」(消91.1%、打64.4%)((6)ブドリの「木こりで(i)」、「妹があつて(t)」も同様)のような複文の繋ぎの読点も読み手が打ちやすいものの一つであると言える。これらの節も人物の状況を限定しており、読点を打つ基準が、文法的な単位の違いより、意味的な解釈の違いに基づいていることをうかがわせる。

これらとは区別して、使用者が機械的に使っていると思われる読点がある¹⁹⁾。まず、よく指摘される(1) ii「語句を並べる場合」である、(4)勝負事の「めんこ・ねっき・ばい」の繋ぎには読点が、打つ・消すの両方で使われやすい(平均:81.4%)。また、(5)杜子春の「若者は(a)」や(6)ブドリの「グスコブドリは(a)」のような(1) ix「叙述の主題となる語のあと」も読点が使われやすい(平均:81.4%)。

3.1.2 聞いた文の読点(調査3)

この調査は、被験者が音読を聞いて書

く、半創作的な文章における読点の打ち方を調査するという点で新たな試みである。音読するテキストは、「夢十夜」(夏目漱石著)の第七夜の冒頭部分である。三種類の音読それぞれで、「間」の取り方が異なる(7)「オーディオブックCD」、(8)「新潮CD」の二市販品と、それを参考に、意図的に間の数を増やして作成された(9)「自作CD²⁰⁾」を使用した。音読の間は、(7)～(9)の各文に「・」で示しており、その数が長さを表している。

(7) 何でも・大きな²¹⁾船に乗っている。この船が・毎日毎夜・すこしの絶間なく・黒い煙を吐いて・浪を切って進んで行く。凄じい音である。けれども・どこへ行くんだか分らない。ただ・波の底から・焼火箸のような太陽が出る。(オーディオブックCD)

(8) 何でも・大きな船に乗っている。この船が・毎日毎夜・すこしの絶間なく・黒い煙を吐いて浪を切って進んで行く。凄じい音である。けれども・どこへ行くんだか分らない。ただ波の底から焼火箸のような太陽が出る。(新潮CD)

(9) 何でも・_(a)大きな_(b)船に_(c)乗っている。この船が・_(d)毎日_(e)毎夜・_(f)すこしの絶間なく・_(g)黒い_(h)煙を_(i)吐いて・_(j)浪を_(k)切って・_(l)進んで行く。凄じい_(m)音である。けれども・_(n)どこへ行くんだか_(o)分らない。ただ・_(p)波の底から・_(q)焼火箸のような_(r)太陽が_(s)出る。(自作CD)

聞き書きした文で読点能打てる場所を(9)に(a)～(s)で示した。この調査の眼目の一つは、音読するときの間の取り方

が、聞き書きの読点の使い方に影響するかどうかを明らかにすることにある。調査の結果、予想通り間の異なる三種の音読で読点の打たれやすい場所に違いが見られた(末尾の[表4]を参照)。

まず、新潮CD<オーディオCD<自作CDの順で間の数が多くなっているが、それに比例して、読点の数が増える傾向が見られる。また、調査1、2と比較してみると、消す、打つに比べて全体的にかなり少ないことから、「(適正文にするために)読点を打つ」と指示されていない使用者は、積極的に読点を打つわけではないという傾向があると考えられる。

調査3では、そもそも読点の総数が少ないので、4割程度数の読点被打たれていれば、比較的打ちやすい場所と判断した。個別の事例を見ていこう。

まず、消す・打つの場合と同様に、夢十夜の「(毎日)毎夜(f)」のような「時」の修飾句のあとも、同様に読点を打たれやすい場所であると思われる(38.3%)。次に、「すこしの絶え間なく(g)」(42.6%)、「黒い煙を吐いて(j)」(55.7%)のように多数の従属節が述部にかかる場所には、聞き書きの場合でも比較的多くの被験者が打ちやすいようである。

一方で、同様に並立する「波を切って(l)」(8.7%)のあとに読点被打たれにくいのは、続く「進んでいく」との繋がりが強いことに理由がある。これは、おそらく読み手の側から打つ読点の動機に、後の4.2で述べる文頭から順に読み進めながら、まとまっていると認識できたところまでを区切っておく、すなわち理解のための指標とする機能があるからではないかと考えられる。

最後に、使用者が機械的に使っていると思われる読点として、「けれども(n)」や「ただ(p)」など、(1)vi「文の始めに用いる語頭の副詞や接続詞のあと」の読点がある。ただしこの場合、すべての音読に間があるため、どちらの要因が主に影響しているのかは分からない。

次に、音読だけにある間の長さと言点の関係について、使用者の実態を整理した。まず、間の長さと言点の打ちやすさについてである。(7)の音読で長い間を取っている(・・の場所)「何でも(a)」、「この船が(d)」、「すこしの絶え間なく(g)」における読点の使い方の三つの聞き書きの違いを比較する。

[表2] 間の長さと言点の打ちやすさ

	何でも	・	この船が	・	少しの～	・	計
オーディオ	17	2	11	2	19	2	47
新潮	16	1	9	1	12	1	37
自作	16	1	13	1	18	1	47

[表2]のように大きな差異はなかった²²⁾。よって、間の長さは直接読点の打ちやすさに影響しないことが分かる。また、読点の打たれている場所には、どの音読でも間があり、使用者が音読の間で取り敢えず読点を打つかどうか、すなわち「音の切れ目」で検討をしていることをうかがわせる。注3で谷崎が指摘するように二つが重なることも少なく無いと思われるが、調査3が聞き書きである以上、音の切れ目が読点の使われ方に少なからず影響を及ぼしていると見る方が妥当であろう。逆に、先の(8)の音読の「黒い煙を吐いて(j)」のあとに間がないにもかかわらず、多くの者が読点を打っていること(43.2%)から、使用者が、音の切れ目だけではなく、意味の切れ目も意識して

いることが分かる。

3.2 ここまでのまとめ

ここまで、読点の使い方について「読んで消す場合」、「読んで打つ場合」、「聞き書きして打つ場合」という異なる条件で調査・検討を行った。(1)の広田の規範的との異同をまとめる。

(10) 読み手・聞き手側が打つ読点

- a. 叙述の主題となる語のあと→(1) ix
- b. 語句を並べるとき→(1) ii
- c. 接続詞のあと→(1) vi
(※これらは機械的な打ち方なので、
(1)の規範とも対応している。)

(11) 消す読点と打つ読点の相違点

- a. 読点の数は、読んで消す場合より、打つ場合の方が、相対的に多くなる。
- b. 限定・条件などがある場合でも、読んで消す場合は使うことが多いが、打つ場合は積極的には打たない。
- c. 「場所」の修飾句に比べて、「時」「人物」「状況」などの場面設定の修飾句のあとには読点が使われやすい(聞き書きの場合も同様である)。

(12) 聞き書きの読点の特徴

- a. 聞き書きでは、読みに比べて読点の使われる数がさらに少なくなる。
- b. 音読で「間」の数が多くなるほど、読点の打たれる数が多くなる。
- c. 音読で「間」の長さが長いことは、読点の打たれやすさに影響しない。

4. おわりに

4.1 読み手、聞き手が打つ読点

我々が、意識的に整った文章を書こうとすると、これまで学習してきた規範に照らし、形式に準じて読点を打つこと

を心がけているように思う。しかしながら、実際には(1)の規範が常に遵守されているわけではないし、本稿で取り上げた「完成した文章を追いながら読点を打つ」という行為においては、それぞれの条件で、読点の打ち方に差異が見られる結果となった。

まず、「読点を消す」ことは、ばらばらのパーツからボトムアップ式に文意を組み上げていく作業であると考えられる。繋ぎの強い部分の読点だけが優先的に削除されるため、うまく繋がれずに残された読点も少なからずあるはずで、結果的に読点の数が多くなる。

次に、「読点を打つ」ことは、繋ぎのの見えない文章をトップダウン式に切り分けていく作業であると考えられる。明らかに内容が繋がっていない場所だけに読点を打つので、読点の数は、消す場合に比べて少なくなる。

最後に、「聞き書きして読点を打つ」ことは、内容の理解に対する関心よりも、「音の切れ目」など音読の再現の方へ意識が傾くため、読点の使い方が他の二つと異なるようである。おそらく三つの調査の中で、文意を理解するという意識が最も希薄であり、読点そのものが使われにくいのであろう。

このように読み手・聞き手の側から、それぞれの方法で文章の再構築が行われ、その過程で要求された読点が使われていると考えることによって、使い方の幅を説明することができる。

4.2 「読む」と「聞く」の文章創出における接点

そもそも読み手・聞き手が読点を打つ

という行為の本質とは何であろうか。一般的に文章の書き手が読点を打つ動機は、1.で述べたように、第一には読み手への配慮ということになるが、ここで、それ以外にどのような意識が働いているのかを考えてみたい。

学生の書いた文章の添削をしていると、時々「この話の主人公、吉田は、隣人、浦辺という、友人を作ることが、目的で、～」のような読点の使い方を見かけることがある。この読点の使い方にはやや違和感を覚えるが、これが文を書く流れを示していると見ることはできないであろうか²³⁾。梅原恭則(2001)に本稿の立場にとって興味深い、次のような指摘がある。梅原は「読点の機能が表現行為と理解行為との双方に及ぶ」(p.14、下線は論者)とし、さらに「書き手は読み手に配慮する前に、自分自身が今書いてゐる文の文意を正確に把握するために、読点を打つのである。」(同)とある。つまり、(書き手の側からではあるが)自らの理解を助ける読点の機能を認めているのである。本稿では、この指摘は読み手・聞き手が読点を打つ場合にもあてはまると考えている。すなわち、4.1で述べた文章の再構築の過程における、ここまでは解釈できたという自分の「理解の足跡」としての読点の使い方を認めたいのである。その目的で打たれた読点は、当然読み手・聞き手の側から打たれる読点に最も多く現れることになると考えられ、これが本稿で主張してきた読み手・聞き手が読点を打つ行為の本質ということになる。

これまでの多くの先行研究は、文学作品などを手本とし、それに倣う形で読点の規範的な使い方を見いだそうとしてき

た。ここで今一度立ち返って、本稿で主張する、読み手・聞き手の側からの読点の使い方を考えることは、読点の機能の全体像を適正に捉える上で必要なことであるように思われる。

注

- 1) 二つの用語は川上(1974)によった。川上は二つの要求を認めながらも、「人が文字言語というものを単なる音声言語の写しや身代わりと見ているのではなく、意味を表し伝える確実有効な手段と見て、大きな期待をかけている[中略] 意味本意ではない句読法などというものは文字通り意味がないということになる」(p.24)と述べ、その重要性が違うことを指摘している。
- 2) (1)は、広田(1959)を小泉(1989)が整理したものを、記号を改めた。
- 3) 谷崎潤一郎(1960)では、「読者が読み下す時に、調子の上から、そこで一と息入れて貰いたい場所に打つことにしておりますが、[中略] 此の使い方は、実際にはセンテンスの構成と一致することが多いのでありますが、必ずしもそうとは限りません。」(p.198、旧仮名遣いを適宜改めた)と述べており、自らの文章では(xi)が優先されるとしている。
- 4) 本稿で取り立てて議論する読点の規範について下線を附した。
- 5) ただし、それらの規範的な場所すべてに機械的に読点を打っていくと、細切れすぎて逆に読みにくい文章になることも指摘されている。
- 6) 梅原(2001)や岩畑貴弘(2004)は、文の長さと読点の打たれやすさとの関係

- を指摘している。特に岩畑では、文の構造と計算式によって算出した長さに従って、機械的に適正な場所（原文とほぼ同じ場所）に読点を打つことができると主張している。
- 7) 高専（高等専門学校）は、五年一貫制で、一年、三年生はそれぞれ高等学校一年、三年生の学齢に相当する。
- 8) 本稿の調査に用いたテキストは、縦書きで提示し、改行は原本に従った。
- 9) [表1] に対してカイ二乗検定を行った結果、有意差は見られなかった。
 $(\chi^2=2.093, df=4, P>.05, ns)$
- 10) 本調査の目的は、読点の多寡が読みやすさに及ぼす影響をみることにあつた。当然ながら「読点の打ち方は正しいか」など、規範意識を問う課題では結果が異なる可能性がある。
- 11) 論者が読書感想文などを添削する限りでは、彼らの規範意識に反して「「～」と」のあとに読点を打つ者がかなり少なくなつたように思う。
- 12) 小泉（1989）は、谷崎潤一郎著の『細雪』（6ページ）を対象に読点の使い方を調査したところ、「限定・条件などを表す文や語句のあとに使う」場合が、読点全体の56%を占めていたと報告している。読点を打つための条件の出現率が一様ではないことを考慮しても、かなりの偏りがあると言える。
- 13) ここで言う、一般の使用者とは、読点の使い方に関して特段意識的な考えを持たず、感覚的に用いている者を指す。以下、「使用者」とする。
- 14) 高木（1974）では、読点を除いた所与の文に、読み手が読点を打っていくという方法で調査を行い、規範意識と使用者の読点の打ち方とにずれがある可能性を指摘している。
- 15) 森山（2012）では、小学生の「そうじ作文」を分析し、各発達段階においてどのような読点の打ち誤りの傾向が見られるのかを明らかにしようとしている。
- 16) 「ねっき」「ばい」は、事前に釘やコマの技術を競う子供の遊びと説明した。
- 17) 匿名の査読者の方から、消す場合と打つ場合とで読点の多寡に差が生じる理由について、「読点のない文章に、自分の判断で読点を打つのと、すでに読点が打たれた（既成の）文章に対し、高校生の分際で、それを「添削」して読点を削るのとは、心理的な負担感が違う。」というご指摘を頂戴した。とすれば、打つ読点の方が、読み手・聞き手の本来の使い方をより反映していることになる。
- 18) 「使われた率」は、 $\langle \text{当該の位置に読点が打たれた数} \rangle \div \langle \text{被験者数} \rangle$ の値を表している。以下の括弧内の数値も同様。
- 19) 本稿では直接考察していないが、(1) iv「文の中止するところ」、v「文の成分を倒置した場合」、vii「感動詞、呼びかけ～」なども、当然機械的に読点が打たれやすい場所であると思われる。
- 20) 「自作CD」では、(1) の規範を参考に間を取って音読した。読み手は40代男性、東京都出身者である。
- 21) ここに「間」と言えないほどの小さな休止がある。
- 22) [表2] に対してカイ二乗検定を行った結果、有意差は見られなかった。
 $(\chi^2=1.052, df=4, P>.05, ns)$
- 23) 当然このままでは、読点の余剰使用

[表3] 調査1:「消す」読点と調査2:「打つ」読点の調査結果(被験者:90名)

		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	bb	cc	計	
勝負事	消す	6	88	6	18	77	50	40	75	1	58	16	1	77	10	22	77	89	89	6	76	38	5	17								942
	打つ	3	85	0	0	24	30	30	59	0	18	0	0	66	4	2	49	58	57	0	65	16	0	5							571	
	両方	0	84	0	0	21	23	20	50	0	14	0	0	61	0	0	43	58	57	0	57	11	0	2							501	
杜子春	消す	78	25	84	15	0	87	28	12	82	4	7	62	4	9	0	44	58	77	2	36	9	9	86	31	28	52	27	19	0		975
	打つ	57	8	54	3	0	85	2	0	58	0	1	16	0	1	0	42	19	49	0	4	0	0	82	15	8	9	3	0	0		510
	両方	46	7	53	1	0	83	2	0	52	0	0	14	0	1	0	24	15	43	0	2	0	0	80	7	5	4	3	0	0		442
グスコーブ ドリの伝記	消す	84	10	0	3	20	77	9	0	86	2	0	77	15	7	76	0	4	72	2	86	21	31	6								688
	打つ	80	5	0	1	8	61	4	0	85	0	0	63	0	1	42	0	0	57	0	82	2	5	3								493
	両方	76	2	0	0	3	54	0	0	82	0	0	58	0	0	39	0	0	45	0	80	1	4	0								444

※「両方」が示すのは、「消す」と「打つ」のどちらにも該当する者の数である。

[表4] 調査3:「聞き書き」読点の調査結果(被験者:115名)

(8)~(9)の読点	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	計
CDで聞く(38名)	<i>17</i>	0	0	11	7	<i>13</i>	<i>19</i>	0	0	<i>19</i>	0	2	0	22	0	<i>24</i>	5	0	0	<i>139</i>
新潮(37名)	<i>16</i>	0	0	9	2	<i>12</i>	<i>12</i>	0	0	<i>16</i>	0	0	0	<i>16</i>	0	5	4	0	0	<i>92</i>
自作CD(40名)	<i>16</i>	0	0	13	2	<i>19</i>	<i>18</i>	0	0	<i>29</i>	0	8	0	<i>19</i>	2	<i>23</i>	13	0	0	<i>162</i>

※本稿で論の根拠とした数値については、表中ゴシック斜体で示してある。

として添削の対象となる。これまで、このような読点の一部は、(1) xi「息の切れ目や読みの間」の場所として処理されてきたと考えられる。

主要参考文献

- 岩畑貴弘(2004)「読点の使用とその決定要素について―「構造」と「長さ」から―」『人文研究』154、神奈川大学人文学会
- 梅原恭則(2001)「読点の打ち方―国語教師のために―」『信大国語教育』11、信州大学教育学部
- 川上肇(1974)「点の問題―補助記号論―」『言語生活』277、筑摩書房
- 小泉保(1989)「句読法概説」『日本語学』8-6、明治書院
- 広田栄太郎(1959)『用字の技術―当用漢字・現代かなづかい・新送りがな』東京堂
- 高木翠(1974)「句読点をどう打つか―一人一人に対する調査結果―」『言語生活』277、筑摩書房

谷崎潤一郎(1960)『文章読本』中央公論社

本多勝一(1982)『日本語の作文技術』朝日新聞社

森山卓郎(2010)「小学生の文章での句読点―小学生のそうじ作文を例に―」『京都教育大学国文学会誌』36、京都教育大学国文学会

文部省教科書局調査課国語調査室(1946)「くぎり符号の使い方【句読法】案」

音声資料

『夢十夜』新潮CD、新潮社(1997)

『夢十夜』オーディオブックCD、パノローリング(2009)

追記

脱稿前に、石黒圭(2004)『よくわかる文章表現の技術Ⅰ』(明治書院)を拝読した。本稿の考察で踏まえておくべきものであったことを報告しておく。なお本稿の主張に大きな修正はない。

(小山工業高等専門学校)